

## ▶▶▶ 和歌山大学の更なる防災力強化プロジェクト

# 災害に強い大学づくりを

### ▶ プロジェクトメンバー

○塚田 晃司（システム工学部）  
 平田 隆行（システム工学部）  
 宮定 章（災害科学・レジリエンス共創センター）  
 有馬 専至（Kii-Plus）  
 西川 一弘（Kii-Plus）  
 南出 考（Kii-Plus 価値共創研究員）

○はプロジェクト代表

### ▶ 共創相手

社会福祉法人 和歌山県社会福祉協議会  
 社会福祉法人 和歌山市社会福祉協議会

### プロジェクトの背景

2011年3月の東日本大震災、および同年9月の紀伊半島大水害から10年が経過した。その間にも熊本地震や西日本豪雨など日本各地で大規模な自然災害が発生している。そして、和歌山大学が立地する紀伊半島においても、南海トラフ地震や中央構造線断層帯による地震にともなう被害や、大型台風などによる風水害の危険にさらされている。

自然災害の危機は常に身近に存在している。平時から災害への備えが重要であり、和歌山大学の防災力強化も重要な課題である。

### プロジェクトの目的

和歌山大学の防災力強化のための取り組みとして、本プロジェクトでは、災害時に活躍できる人材の育成、ならびに、災害時に地域に貢献できる体制づくりを目的とする。

災害時に活躍できる人材には、被災地に出向いて復旧・復興に関わる活動をする災害ボランティアだけでなく、被災地において災害ボランティアを受入れ、被災地域のニーズに合わせてボランティアの割当てなどを取り纏める災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を運営できる人材も重要である。これらの人材の育成のために、本学の学生だけでなく教職員も対象として、災害

時に活躍できる人材育成の拠点としての災害ボランティアステーションを設置、運営することを目的とする。

また、地域の一員として和歌山大学が地域に貢献するためには、地元の災害ボランティア活動団体との連携を深め、平時から積極的に防災訓練等の活動に参画していくことが重要である。この実現のために、地元の和歌山県、和歌山市の社会福祉協議会との連携を強化することを目的とする。

### プロジェクトの活動内容

（1）和歌山大学災害ボランティアステーションの開設

2011年3月11日14:46に発生した東北地方太平洋沖地震に起因する東日本大震災からちょうど10年となる2021年3月11日に、和歌山大学災害ボランティアステーション（愛称：むすぼら）を開設した（図1参照）。



図1 「むすぼら」発足式

2021年度より災害ボランティア活動への参加希望者を学生・教職員を対象に募集を開始し、本格的に参加者間での交流を進めていく予定である。

本ステーションは、下記の2点を目的として、災害科学・レジリエンス共創センター内に設置した災害ボランティア部会が運営していく。

(ア) 多発する災害に対して決して他人事はなく「自分ゴト」として捉えたとともに、災害フィールドに関わることを通じて、災害時の危機管理能力・対応力の向上を目指す。

(イ) 大規模災害が発生した場合、災害ボランティアの育成・諸活動を通じて、当該被災地域の復旧・復興に貢献する。

(災害科学・レジリエンス共創センター災害ボランティア部会要項より引用)

(2) 地元が被災したことを想定した災害対応訓練への参加

和歌山大学が立地する和歌山県、および和歌山市の社会福祉協議会（以下、社協）と共創して、和歌山県社協が主催する広域・同時多発災害対応訓練に参加した。この訓練では、和歌山県社協を本部として、和歌山市社協、海南市社協、および高野町社協が運営する3つの災害VC間で情報共有しながら2021年2月20日に実施した。

和歌山県社協では、県内を紀北、紀中、紀南の3ブロックに分けて、毎年各ブロックで対応訓練を実施している。2020年度は、紀北ブロックの順番であったため、和歌山県社協と上記の社協とが連携して実施された。

2020年度の災害対応訓練で、水害を想定した訓練であった。線状降水帯の発生による局所豪雨により水害が発生したとの想定のもと、紀の川右岸（北側）が孤立した想定での訓練であった。和歌山県社協による災害VC本部は和歌山市中心部である左岸（南側）に設置されるため、和歌山大学が右岸（北側）のサテライトセンターとしての位置づけで災害VCの設置運営訓練となった。

想定災害は、2021年2月12日に発災したものとし、同年2月19日までに災害ボランティアの募集、および災害VC開設準備をし、同年2月20日に災害VC稼働開始というシナリオである（図2参照）。

シナリオの各フェーズでの訓練実施内容の概要は以下のとおりである。

(ア) 発災（2021年2月12日）

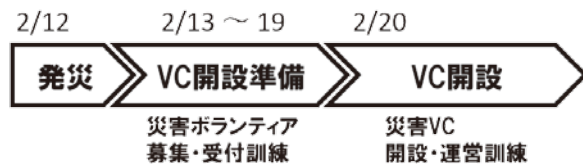


図2 訓練シナリオ

線状降水帯の発生による局所豪雨により、中小河川の氾濫、土砂崩れ、および家屋の浸水などの被害が生じたことを想定し、社協による被災状況把握、対応協議、運営支援者派遣の調整訓練をおこなった（訓練主体は主に社協）。

(イ) 災害VC開設準備（2021年2月13日～19日）

災害ボランティア受付にあたって、事前にネットを活用した募集と受付訓練をおこなった。和歌山市、海南市、高野町の各社協が設置する災害VCからGoogleフォームを用いたボランティア募集情報の発信訓練を実施した（訓練主体は社協）。

(3) 災害VC開設（2021年2月20日）

訓練当日は9:30より災害VCの運営訓練を実施した。和歌山県社協、和歌山市社協による災害VC本部と、海南市社協、高野町社協による災害VC訓練とZoomを利用してオンラインによる情報共有をしながら実施した（図3参照）。



図3 訓練前のオンラインによる情報共有

訓練終了後、拠点毎で訓練の振り返りを実施し、最後に拠点間で訓練振り返り結果について情報交換して訓練終了となった。

今回の訓練の1回限りではなく、今後も継続して社協主催の訓練等の活動に参加していくことを検討していく。

訓練当日の参加者は、本学関係者は教職員9名、および学生2名の11名、市社協関係者が12名の総勢23名であった。参加者は2グループに分かれ、災害VC運営と災害ボランティアの両方の役割での訓練を交代して実施した。

災害VC運営訓練では、実際の運営体制にあわせて、ボランティア受付班、オリエンテーション班、マッチ

ング班、資機材班、報告班、および総務班の6つのグループに分かれて担当業務の流れについて市社協関係者の指導のもとで実施した（図4参照）。

災害ボランティアの役割での訓練では、実際にボランティアとして被災地の災害ボランティアセンターに到着した際、どのような手順で被災地でのボランティア活動に関わるのか、その手順について体験した。

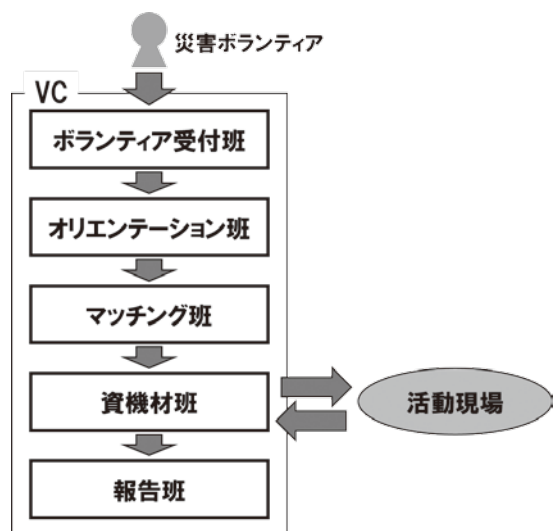


図4 VCでの各班の流れ

上記の災害VCの運営体制における各班の活動内容と、各班での訓練の様子は以下のとおりである。

#### （ア）ボランティア受付班

災害ボランティアの受付業務をおこなう。氏名、連絡先等を受付票に記入してもらい、名札の作成と、マッチング班で使用する付箋紙へ氏名を記入してもらう（図5参照）。



図5 受付で受付票へ必要事項の記入と名札を作成する

#### （イ）オリエンテーション班

ボランティア活動の注意点や心構えを災害ボランティア参加者に対して説明する（図6参照）。



図6 災害ボランティア参加者に注意事項を説明する

#### （ウ）マッチング班

被災地で求められている作業のニーズと、その作業を希望する災害ボランティアとを結びつけ、ニーズ受付カードを渡す（図7参照）。



図7 作業ニーズに対して挙手する災害ボランティア

#### （エ）資機材班

ニーズ受付カードの内容に応じて必要な資機材の貸出と、作業完了後の返却チェックをおこなう。

今回の訓練では、資機材を想定した紙カードを災害ボランティアに渡し、その資機材でニーズに対してどのような作業をすればよいか、グループを構成して机上で検討する形式をとった（図8参照）。



図8 資機材を用いてどのように作業実施するか検討する



## (オ) 報告班

災害ボランティアは、活動完了後に活動報告書を作成し、ニーズ受付カードとともに提出して終了となる(図9参照)。



図9 活動終了後に活動報告書を提出する

## プロジェクトの成果

学内に災害ボランティアステーションを設置し、地域の災害対応訓練へ参加したのを一つの契機として、地域の防災活動主体との連携をさらに強化していくことを目指し、2021年3月10日に和歌山県社協和歌山県災害ボランティアセンターと災害科学・レジリエンス共創センターとの間で災害ボランティア活動支援に関する協定を締結した(図10参照)。



図10 協定締結式(2021年3月10日 於 和歌山県社会福祉協議会)

本協定は、災害ボランティアの育成、および活動に向けた支援を迅速かつ効果的に行うことを目的とした協定である。平時には、災害ボランティア活動に関する研修、訓練等への参加、災害ボランティア活動に関する情報の相互提供などについて協力し、災害時には本センターの災害ボランティアステーションが被災地で災害ボランティア活動をおこなう際の活動先の調整などについて協力することを謳っている。

以上の2020年度の成果を起点として、2021年度以降も災害ボランティアステーションが中心となって行動し、和歌山大学の防災力強化に向けて取り組んでいく。

